

# 人新世の「資本論」

著者 齊藤幸平(大阪市立大学大学院経済学研究科準教授)  
1987年生まれ、経済思想、社会思想研究の若き俊英  
集英社新書 2020.9 1020円+税

「気候変動、コロナ禍…。文明崩壊の危機。唯一の解決策は潤沢な脱成長経済だ。」(本書カバーから)

「人類の経済活動が地球を破壊する「人新世」=環境危機の時代。気候変動を放置すれば、この社会は野蛮状態に陥るだろう。それを阻止するためには資本主義の際限なき利潤追求を止めなければならないが、資本主義を捨てた文明に繁栄などありうるのか。

いや、危機の解決策はある。ヒントは、著者が発掘したマルクスの思想の中に眠っていた。世界的に注目を浴びる俊英が、豊かな未来社会への筋道を具体的に描き出す。」(本書カバー裏面)

# 第1章 気候変動と帝国的生活様式

- 資本主義は自らの矛盾を外部に転嫁し、不可視化する。  
現代のグローバル社会では、ノース(先進諸国)がサウス(後進諸国)から収奪し、その代償を押し付ける帝国的生活様式である。
- 収奪の対象となるのは、労働力にとどまらず、地球環境全体となり、それも既に奪い尽くされそうになっている。
- パリ協定・・・目標達成困難、気温3.3度との予測もある。

もはや後戻りできないポイント・オブ・ノーリターンが目前に近づいている。

# 第2章 気候ケインズ主義の限界

- こうした環境危機を避けようとする様々な試みが提起されてきた。
  - グリーンニューディール・・・緑の公共投資で環境と経済を同時解決は可能か
  - 持続可能な開発目標SDGs・・・「免罪符」? 「大衆のアヘン」
  - 経済と環境負荷のデカップリング・・・絶対的デカップリングは手遅れ
  - グリーン技術・・・電気自動車などの新技術も新たな矛盾

こうした対策も、経済成長を前提とする限り、危機を回避することはできない。

# 第3章 資本主義システムでの脱成長を撃つ

## ●脱成長の資本主義は可能なのか？

ラフースは「ドーナツ経済論」で、環境的な上限を越えず、社会的な土台が不足しない、安全で公正な範囲の中に(ドーナツの輪)、多くの人が入るグローバル経済システムを提起している。

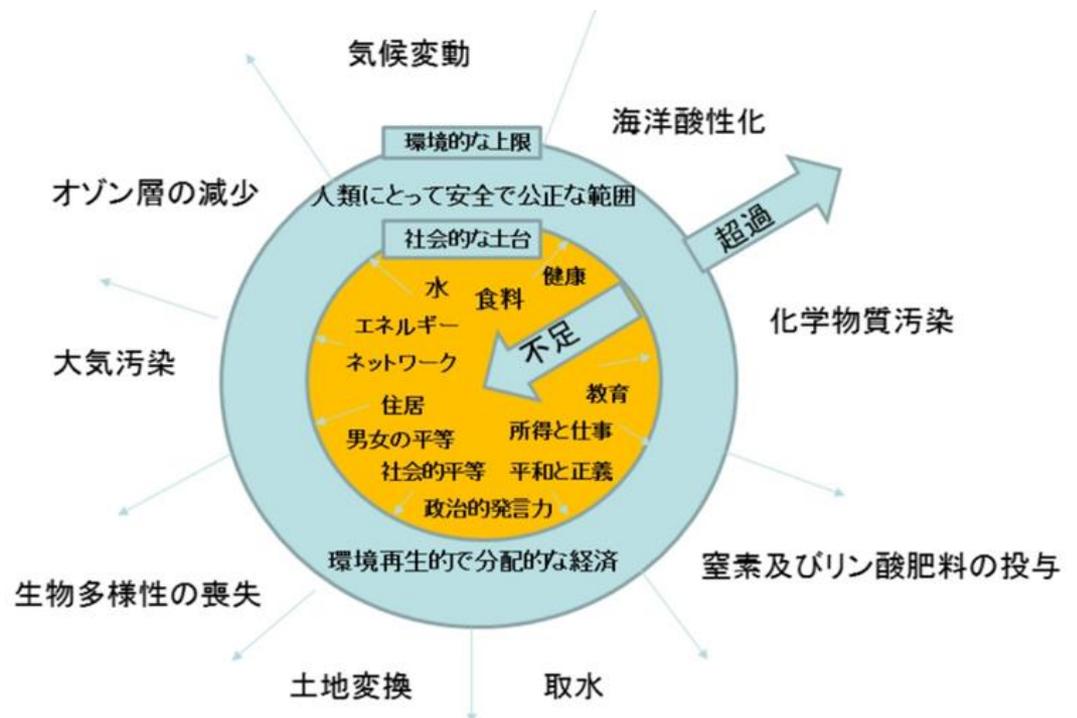
●しかし既に、ノース(先進諸国)は大きく環境上限を超え、サウス(後進諸国)は土台が欠乏するという不公正が存在することが問題である。

外部化と転嫁に依拠する資本主義が続く限り公正は実現できない。

●現状が続けば未来の選択肢は、

- \* 気候ファシズム
- \* 野蛮状態
- \* 気候毛沢東主義

のいずれかの混乱状態になる。



## 第4章 「人新世」のマルクス

●どうすればいいか、その答えのヒントはマルクスにあった。  
(新全集MEGAなどに基づく晩期マルクスの研究に基づき分析)  
生産力至上主義だった初期のマルクスは、  
(第1の転換)「資本論」第1巻ではエコロジカルな物質代謝論に転換した。  
(第2の転換)さらにその後エコロジー研究や共同体研究を深化させ、循環型の共同体社会の定常性こそが、植民地主義に抵抗し、資本の力を打ち破り、 Kommunismus 打ち立てることを可能にするとの考えに転換した。  
そして晩期マルクスは脱成長 Kommunismus に到達していた。

|                  |   | 経済成長 | 持続可能性 |
|------------------|---|------|-------|
| 1840年代<br>1850年代 | 生産力至上主義<br>「共産党宣言」「インド評論」               | ○    | ×     |
| 1860年代           | エコ社会主義<br>「資本論」第1巻                      | ○    | ○     |
| 1870年代<br>1880年代 | 脱成長 Kommunismus<br>「ゴータ綱領批判」「ザスリーチ宛の手紙」 | ×    | ○     |

## 第5章 加速主義という現実逃避

- 脱成長 Kommunismusと真逆の考え方として加速主義(左派)がある。根本的な社会的変革ためには、現行の資本主義システムを加速・拡大すべきという考え方で、環境の危機的事態も新技術を利用すれば解決できると主張する。「完全にオートメーション化された豪華な Kommunismus」  
しかし、成長を求める加速主義はより深刻な生態的な危機を招く。また、新技術(ジオエンジニアリングなど)も副作用が大きく一層危機を深化させる。
- 真に危機を回避するためには、資本主義の消費主義とは異なった「潤沢さ」を再定義する必要がある。(ラディカルな潤沢さ)

## 第6章 欠乏の資本主義、潤沢な Kommunismus

- 資本主義は経済成長、技術発展を飛躍的に進めたが、一方で持続可能で潤沢だったコモンズを破壊し、共有財産だったものが商品となり、その結果欠乏を生み出すシステムである。(土地、水力・・・囲い込み、化石資本に)
- コモンを取り戻すのが Kommunismusであり、それによって「ラディカルな潤沢さ」を再構築することが可能となる。(コモンの再建)
  - 電力(国営・独占企業→再生エネルギーなどコモン化)
  - IT(GAFA囲い込み→「プラットフォーム協同組合」などによるコモン化)
  - 生産手段を自律的・水平的に共同管理するワーカーズコープの重要性  
スペインのモンドラゴン協同組合(金融・工業・小売・ナレッジ、10万人)

## 第7章 脱成長 Kommunismus が世界を救う

●未来の選択肢として「脱成長 Kommunismus」が明らかになった。

その柱は、①使用価値経済への転換 ②労働時間の短縮 ③画一的分業の廃止 ④生産過程の民主化 ⑤エッセンシャルワークの重視 である。

●どのように実現するか？ 労働と生産の場の変革から生まれる社会運動は、政治を動かす可能性を持つ。

○デトロイト(小さな種が実を結びつつある) 自動車産業の衰退、治安悪化・荒廃、地価下落、都市再生の市民運動、市民有志やワーカーズコープ、市などによる都市農業の推進、栽培・販売など住民のネットワーク再構築、治安の改善、コミュニティ再生)

## 第8章 気候正義という「梃子」

●バルセロナ(フィアレスシティ)の気候非常事態宣言

スペインの危機(緊縮、オーバーツーリズム) → 15M運動(広場占拠) →

市民プラットフォーム政党 → アダ・クラウ市長(市民運動と政治の結合)

○市民の力の結集としての240項目に及ぶ行動計画(諸課題の結合)

○「気候正義」にかなう経済モデルを表明(グローバルサウスとの連携)

○Munichism(地域主義・再公営化)一国境を越える自治体主義

●市民運動と政治の結合は、「政治主義」とは全く異なる民主主義の可能性。

「3.5%」の人々が動けば、社会が大きく変わる。